

## 第188回 「元気に百歳」クラブ俳句サロン「道草」(通信句会)開催

新型コロナウイルス禍による3か月間の休会は、少し長過ぎましたでしょうか。5月下旬に奥田さんから「6月は『通信句会』にしても、とにかく俳句サロン「道草」を開催しましょう」というメールをいただいたときは、欣喜雀躍しました。

数日にして企画はまとまり、会員の皆さまへは6月1日(月)に、兼題を提示する予定で進行し、住田先生に一連の作業をお願い致しました。通信句会となりますと、作業量も多く、住田先生と奥田さんには、何かとお手数をおかけすることになりますが、どうぞよろしくお願い致します。

この度の新型コロナウイルス感染症の蔓延は、少しオーバーな表現をしますと、地球上の人間社会が、正体の掴めないウイルスとの接点を暗中模索しています。このウイルス菌との闘いは、人類が起案する儀式の全てと、スポーツ大会、芸術、音楽、演芸などの全行事を中止、または延期に追い込みました。私たちも「自粛」というスローガンを忠実に実行し、自宅謹慎のような日々を送りましたが、これらが心身の疲労を呼び、精神的なダメージも受けました。今回『通信句会』の開催によって、再び「俳句を詠む」という行動をとることになり、私たちの心身を甦らせてくれました。

令和2年6月1日(月)、奥田さんから皆さんに、通信句会のご案内を配布しましたところ、18名の方が参加して下さいました。芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、上田枯葉さん、太田一光さん、奥田和感さん、金田月草さん、君塚明峰さん、木村栄女さん、住田幸佳さん、高瀬荻女さん、中島懂岳さん、辻柴楽さん、原晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白然の句が、住田先生のところ集まりました。初めての「通信句会」に、このように大勢の皆さまにご参加いただき、有難うございました。

住田先生が提示して下さいした兼題二句と自由題一句の三句を、期限日までに皆さんが詠み、住田先生に提出しました。そして、皆さんがその中から優秀句を選んで、投票しました。結果として天賞句、並びに最多得票賞(☆印)句の栄に輝いたのは、下述の通りです。いつものように一堂に会して、限られた時間の中で体感する句会の迫力と面白さ、更に二次会での和やかさには格別の楽しさがあります。でも、こうして時間をかけて兼題と取り組み、句を詠むという充実感もまた新鮮なものでした。

誠に僭越ながら、今回、皆さんの詠まれた句には、これまでにない情景の広がりを感じますし、その結果として、選句が多く、句に分散して投票されたように思われます。

### 兼題1. 「サングラス」

◎『やまこえて青空映すサングラス』	晶如	天1
◎『葉山来て父の若き日サングラス』	柴楽	天1
◎『サングラス外す明暗男ぶり』	一光	天1
◎『サングラス瞳の奥のウブごころ』	懂岳	☆8
◎『どうかしら鏡に問うてサングラス』	月草	☆8

### 席題2. 「片蔭」又は「片かげり」

◎『片蔭が江戸に導く蔵の街』	柴楽	天3☆9
◎『山門を入れれば静寂と片かげり』	傘吉	天2
◎『片蔭に人影もなく椅子ひとつ』	多佳	天1
◎『片かげり信号待ちに一の列』	和感	天1

### 席題3. 当季雑詠の自由題句「夏」

◎『閉店の紙閃いて五月尽』	栄女	天2
---------------	----	----

◎『青々と夏座布団の匂ひ立つ』	多佳	天1☆8
◎『新しき日常探す夏となり』	歌多音	天1
◎『初夏や開く飲み会オンライン』	創風	天1
◎『告ぐるとも見えぬ居どころ時鳥』	白然	天1
◎『朝刊にビニールカバー梅雨に入る』	明峰	天1
◎『額紫陽花読書疲れの目に和む』	傘吉	天1
◎『豆皿に印判のずれ夏あざみ』	荻女	天1
◎『夕涼み囲む棋盤のふたつ影』	蒼樹	☆8
(道人の一句)		

口と鼻隠して眼にはサングラス 住田道人

兼題1. では、晶如さんの句「やまこえて青空映すサングラス」が、天賞一つを獲得しました。幾つかの山を越えて登りついた頂上、サングラスを透して見える、視野いっぱい広がる青空のスケールの大きさ。こんな感覚が選者の共感を呼び起こしました。次に柴楽さんの句「葉山来て父の若き日サングラス」が、天賞一つを獲得しました。若き日、葉山の海で青春を謳歌した父、そのサングラス姿が、選者には見えるのでしょうか。そして、一光さんの句「サングラス外す明暗男ぶり」も、天賞一つを獲得しました。粋なサングラス男が、そのサングラスを外すと、一体どんな男であろうかという、まさに「明暗」のかかるユーモアです。素顔もイケメンであり、「明」であることを祈ります。

最多得票賞(☆印)句は、同じ高得票であった憧岳さんの句「サングラス瞳の奥のウブごころ」と、月草さんの句「どうかしら鏡に問うてサングラス」が、獲得しました。それぞれの句意は、サングラスの奥にひそむ「ウブごころ」という正体を、見つけ出した憧岳さんの句と、鏡に映してみても、正体を隠しきれぬかどうかを、鏡に問うた月草さんの句ということになります。「揺れる心のうちの何か」が、選者の共感なのでしょう。

兼題2. では、柴楽さんの句「片蔭が江戸に導く蔵の街」が、天賞三つと最多得票(☆印)賞を獲得しました。見事な場面を選択されました。片蔭を辿っていくと、江戸に通じていたというミステリアスな物語性が、多くの選者を魅了したのだと思います。下五の「蔵の街」が、また良かったです。次に傘吉さんの句「山門を入れれば静寂と片かげり」が、天賞二つを獲得しました。鎌倉の寺院巡りでは、何度もこうした体験をします。そんな情景を傘吉さんは、見事に切り取りました。もう一つ、多佳さんの句「片蔭に人影もなく椅子ひとつ」が、高得票の天賞一つを獲得しました。この句は、普段なら片蔭に居そうな人影が見当たらず、椅子がただ一つという情景ですが、この度のウイルス禍の所為ということを示唆しているのでしょうか。さらにもう一つ、和感さんの句「片かげり信号待ちに一の列」が、天賞一つを獲得しました。信号待ちの時間、片かげりを頼りにして、「一の列」が出来上ったという場面を切り取りました。「俳句は絶好のタイミングでシャッターを押すようなもの」と言われますが、まさにこれでしょう。

自由題では、栄女さんの句「閉店の紙閃いて五月尽」が、天賞二つを獲得しました。この句は当世を見事に捉えていると言えるでしょう。上五、中七の「閉店の紙閃いて」と表現して、読者をこの現場に立たせ、下五で「五月尽」と詠み切りました。今年の五月ほど、「五月尽」という表現がピッタリな五月はないでしょう。次に、多佳さんの句「青々と夏座布団の匂ひ立つ」が、天賞一つと最多得票賞(☆印)を獲得しました。季語の「夏座布団」が、まさに「青々として匂ひ立つ」新鮮さが表現されています。「日本には、こんな夏のあることを、忘れないでいようね」と、語ってくれています。次に、歌多音さんの句「新しき日常探す夏となり」が、天賞一つを獲得しました。この句の冒頭にある「新しき日常」こそ、これからの日本が模索していかねばならないことなのですが、そこをピシヤリと言い切りました。お見事でした。次に創風さんの句「初夏や開く飲み会オンライン」

が天賞一つを獲得しました。「オンライン飲み会」とは、前述の「新しい日常」の一つではないでしょうか。選者の心を掴みました。更に明峰さんの句「朝刊にビニールカバー梅雨に入る」も、天賞一つを獲得しました。いよいよ梅雨入りです。新聞が濡れたビニールカバーの中にある時期、梅雨の鬱陶しさが表現されました。そして、傘吉さんの句「額紫陽花読書疲れの目に和む」も、天賞一つを獲得しました。梅雨時に咲く紫陽花は、濡れて美しく、見るものをホッとさせてくれますが、額紫陽花は、読書で疲れた目を、更に癒してくれるかも知れません。もう一つ、荻女さんの句「豆皿に印判のずれ夏あざみ」が、天賞一つを獲得しました。この句の季語「夏あざみ」は中七の「印判のずれ」に、もっと適切な深い意味があるのかも知れません。花言葉も調べましたが、適切な把握は出来ていません。そして自然の句「告ぐるとも見えぬ居どころ時鳥」も天賞一つ戴きました。訴えるように啼いても、姿を見せない時鳥です。何か身につまされるものがあります。

最多得票賞（☆印）を獲得した句がもう一句あります。蒼樹さんの句「夕涼み囲む棋盤のふたつ影」が、最多得票賞（☆印）に輝きました。戦後十年、私たちが高校生の頃までは、よくあった昔懐かしい夕涼み風景の一つです。この句では「ふたつ影」ですが、周りを取り囲む野次馬の声も、けっこう煩わしいものでした。

7月になりますと、これまでのように「新橋ばるーん」で、「道草」が開催できるのではないかと楽しみにしています。また「通信句会」になるかも知れませんが、どちらにしましても「俳句を詠む」ことが、私たちには充実した生活の基盤です。大切なのは元気に暮らしていることだと思います。病気に負けず、毎日を健康に暮らしましょう。

白然（記）